2012年度事業概要（予定）のご紹介

福祉フォーラムのキーワードは市民と大学の「共生」と「協働」。
地域とともにみなさんとともに、21 世紀のくらしやすいまちづくりをめざして協働の場を創り出します。
2012 年度は以下の事業を予定しています。みなさんのご参加をお待ちしています。
※詳細は決定次第ご案内いたします。

専門セミナーの開催

福祉専門職などが医療・教育・福祉などの現場で直面する問題について解決策や展望を追求します。

対　象：福祉フォーラム会員・専門職など
参加費：有料

●第９回専門セミナー

テーマ：子どもの放課後を豊かなものにするために－大人（専門職）－は何をすればよいのか
日時・講師：５／13（日）　10:00～12:40　工藤　保則（本学社会学部教授）　ほか
６／３（日）　10:00～12:40　森末　哲朗氏
（元六甲学童保育どんぐりクラブ指導員･「放課後泥棒」（雲母書房）の作者）
７／１（日）　10:00～12:40　中村　隆一氏
（立命館大学教授･大津市立やまびこ支援センター相談課　発達相談員）
９／30（日）　10:00～12:40　白石　正久（本学社会学部教授）
参加費：会員１日1,000円（４日聴講の場合3,000円）　一般：2,000円

●第10回専門セミナー

詳細未定

共生塾の開催

社会問題や社会福祉課題について具体的なテーマを取り上げます。

日　時：前期・後期各１回開催予定
対　象：福祉フォーラム会員・地域住民・専門職・学生など
参加費：内容により異なります。

福祉フォーラム2012の開催

講演会やシンポジウム、実践報告などを組み合わせて実施する本フォーラム最大の事業です。

日　時：2012年10月頃開催予定
対　象：福祉フォーラム会員・地域住民・専門職・学生など
参加費：無料

その他、会員を対象にした研究会なども開催します。

お問い合せ

龍谷大学福祉フォーラム事務局（REC滋賀内）
〒520-2194　滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5
TEL：077-543-7744　FAX：077-543-7771
E-mail：r-fukushi@ad.ryukoku.ac.jp
ホームページ：http://rec.seta.ryukoku.ac.jp/fukushi/

電車　JR琵琶湖線「瀬田」駅下車
バス　帝産バス「龍谷大学」行き（約8分）
お車　名神高速「瀬田西IC」（大阪方面から）
「瀬田東IC」（名古屋方面から）より
文化ゾーン方向へ車で約5分　【駐車場有】

JR京都駅
17分
JR瀬田駅
44分
JR彦根駅
バス約8分
龍谷大学瀬田キャンパス

福祉フォーラム通信 Vol.14

発行日：2012年４月１日
発行元：龍谷大学福祉フォーラム

「地」縁的つながりから「知」縁的つながりへ

龍谷大学福祉フォーラム　会長　山田　　容
（社会学部　臨床福祉学科）

福祉フォーラム会員の皆様には、日頃より、本フォーラム事業にご理解とご支援をいただき深く感謝申し上げます。今年度より、福祉フォーラムの会長を仰せつかることとなり、会員の皆様にご挨拶を申し上げます。

会長という大役をお引き受けするにあたり、福祉フォーラム（以下、フォーラム）という組織、事業は、大学において、また地域にとってどのような意味、役割をもつべきなのかを考えてみます。もちろん大学は、教育機関であり、また研究機関でもありますが、同時に大学が持つ知見を社会に伝えていく社会貢献の役割も持っています。特に社会貢献については、龍谷大学は早くからRECを設け、公開講座や企業との連携事業などを幅広く展開しており、中でも公開講座は多くの市民の皆様にご利用をいただいております。

しかし、私はただ大学教員が自らの専門領域について市民の皆様にお教えするということだけが社会貢献の中核ではないと考えております。私がイメージするこれからの大学の社会貢献の機能は、個々人がそれぞれに学ぶ機会を提供するにとどまらず、そこになんらかのつながりが生まれること、すなわち知をひとつの媒介にして、あるいは大学が拠点となり、市民交流を図る場になっていくことです。地域の変容にともない旧来型の住民組織に参加しない住民も増えていますが、その方々がつながりをまったく求めていないわけではありません。「地」縁的つながりから、興味や関心を起点とするいわば「知」縁的つながりへの希求も大いに存在すると考えるからです。

福祉フォーラムでは、その媒体となる関心に福祉を置いています。ここでいう福祉とは、広い意味での「さいわい」と解釈したいと思います。このキーワードを用いることで、幅広い層が関心を持つ問題をテーマにすることができ、そこにあらゆる学問領域、専門家を結集することが可能になります。それを年に一度開催される最も大きな催しである「フォーラム」において実現しようとしています。そして「フォーラム」よりも小規模ながら、より密度の濃い集いとして「共生塾」も複数回開催しています。

さらに、福祉フォーラムでは、「さいわい」を実現する仕事を担って下さっている福祉専門職の人達の学びとつながりの場として、「専門セミナー」を開催しています。高い志をもちながら、労働環境の厳しさや理想を求めることができない現実のため、やむなく職を辞する専門職の方々も多くいます。本学の卒業生も含め、現場に立つ方々を支援する役割も重要だと認識しています。

そして私たち大学教員も皆様の思いから学びを深めており、大学がリアリティをもった教育、研究を行う機関となるためにも、このフォーラムの各事業は意味あるものになっています。すなわち社会貢献は一方通行ではなく、大学にも還元される双方向的な意義をもっています。

このようにこれまでの事業においてもつながりを大切にしてきておりますが、今後もいっそうそれが深まっていくように努めて参ります。各事業にご参加いただく皆様にも、各事業を通してさまざまな出会いをつくる機会としてとらえていただければ幸いです。フォーラムの運営には、大学教員だけではなく、学外からも委員をお願いしており、幅広いご意見をいただくようにしておりますが、会員の皆様からもお声を寄せていただければ参考にさせていただきます。

知の交流とそこから新たに生まれていく共同の媒体となることこそが大学の社会貢献のひとつのかたちではないか、私はこのように考え、任期を努めて参りたいと存じます。この福祉フォーラムが、さまざまな人達の思いの波が出会う岸辺のような場になればと願います。

今後とも皆様方のいっそうのご支援をお願い申し上げます。

第９回共生塾

福島の現実ー地域が『壊れる』と何が起こるのかー ～避難所・仮設の暮らしと支援の実態、コミュニティの今～ を開催しました。

2012年2月25日(土)　13:00～15:20
講　師：鈴木　典夫 氏（福島大学教授）
対　談：山田　　容（本学社会学部准教授）

第９回共生塾は、福島大学の鈴木典夫氏をお迎えし、「福島の現実ー地域が『壊れる』と何が起こるのかー～避難所・仮設の暮らしと支援の実態、コミュニティの今～」をテーマに開催いたしました。鈴木氏は、阪神・淡路大震災以降の日本の大きな災害の支援に携わってきたご経験をお持ちです。今回の震災では、自らが所属する福島大学の避難所の運営や他の避難所への支援、そして現在は仮設住宅に暮らす人々への支援を学生と共に行われており、福島のコミュニティの現実とその再生に向けた取り組みについて、実体験をふんだんに織り交ぜてご講演いただきました。

鈴木氏は、今回の震災、特に福島の被害の現実は、これまでの災害後にみられた復興への歩みをたどることができないものであり、従来の経験則をあてはめることができない状況にあることを指摘されました。中でも原発被害によりいきなり住み慣れた土地を追われた方々について、定住先がなかなか見つからず、就学、就労等の都合により家族もまた分断され、さらに希望が見いだせない苦しみが加わっていることなどから、避難ではなく離散（ディアスポラ）であると表現されたことが印象に残っています。さらに鈴木氏は、地域が「崩壊した」ではなく「壊された」との感覚が強いとも述べられ、自らの責任ではなく苦況を強いられている福島の人々の思いを代弁されました。

講演後の本学教員（山田）との対談では、山田からの「今、福島で起こっていることは単なる地域の解体ではなく、そこにあったつながりそのものの解体ではないか」との指摘に対し、鈴木氏は「確かにつながりは壊されていった。しかし、だからこそ取り組むべきことは明確であり、それはつなぎ直しである」と今後の支援の方向性を示されました。さらに、43名の参加者からの質問に答える中で、震災に対する地域の備えについて、一度でも避難訓練などを経験しておくことは大きな意味を持つことなどを指摘していただきました。また私たちができる支援についても、例えば滋賀に避難されている方々とのつながりを作ることができるのではないかとのご助言をいただきました。

今回の共生塾は、震災一周年の節目にあたる時期の開催となりましたが、遠く離れた地に住む私たちも福島の実情について深く感じとることができ、今後の支援のあり方のみならず、日常の「つながり」の意味を考える機会になったと思います。

参加者の感想

- 地域の防災への前提をかえることが必要だとおっしゃられていたことが非常に印象を受けました。必ず災害が起こることを改めて一人ひとりが認識しなければならないと思いました。
- 福島には負のイメージしか無かったが、前を向いて進んでいると感じた。一方で新しい地域のつなぎ方や改めて日頃の地域福祉が大切だと思った。
- 防災・減災ということが言われますがマニュアル通りの活動は実際の災害時には役に立たないのだと思いました。

第８回専門セミナー

調査票調査（アンケート調査）の技法をマスターする

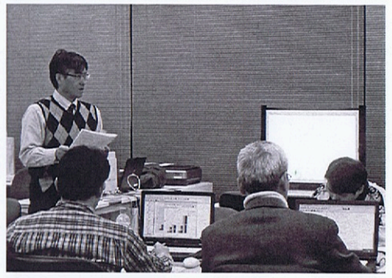
2012年３月３日(土)　10:00～16:50
講　師：津島　昌寛（本学社会学部教授）／工藤　保則（本学社会学部准教授）

３月３日に「専門セミナー：アンケート（調査票）調査の方法」を開催しました。17名の受講者は６時間という長丁場のレクチャーに臨みました。

このセミナーは、今までにアンケート調査の基礎を習得する機会がなかったために、実際に調査を行うことにたいして「不安」を持っている方を対象としています。いわば「初級編」です。受講前に「アンケート調査は難しい。面倒だな」と思っている方が受講後に「案外、難しくないんだ。アンケート調査をするときには、いい調査をしたいな」と思ってもらえたら、というのが企画の趣旨です。

午前の部（担当：工藤）は「アンケートの作り方」を中心にした内容でした。まず「調査はおもしろい」ということを知ってもらうために、担当者の大学の学生が実際に行った調査の実例（「結婚／離婚調査」「マダム調査」）を示し、「調査データをもとに社会をとらえる」ことを話しました。そのあと、「アンケート作成のコツ」のレクチャーでは、「質問文の作りかた」「選択肢の作りかた」「アンケート全体の作りかた」などを説明しました。さいごに、医療福祉の現場にかんする、実際に用いられたアンケートを使い、実習的にその質問文、選択肢などを検討していきました。

午後の部（担当：津島）ではアンケート回収後のデータ分析を中心にレクチャーしました。具体的には、エディティング・コーディング、データ入力、（PCを用いた）データ分析です。データ分析では、Excelのピボットテーブルと統計ソフトSPSSを使って、データの集計の仕方、グラフの作成などを学びました。分析には午前中の医療福祉にかんするアンケートの回収データを用いました。受講者は日頃から仕事でPCやエクセルを使って慣れているのか、作業は問題なくスムーズに進められました。今回は初歩的な分析作業でしたが、より高度な作業を習いたい、と言われた意欲的な方も少なくありませんでした。さいごに、報告書の書き方、データの保管・破棄、回答協力者をはじめとした社会へのフィードバックを説明して、本セミナーを終えました。



後日、受講者の一人（福岡県在住の大学院生で韓国からの留学生）からメッセージをいただいたので、以下にそれを紹介します。

※講師の肩書きは開催当時のものです。

参加頂いた方から

「第８回専門セミナー」に参加して

福祉のことが学びたく韓国から日本に留学しております呉鴻鎮と申します。現在、福岡県立大学大学院で学ばせていただきながら、北九州市手をつなぐ育成会という社会福祉法人で事務局員として勤めさせていただいております。私は人々の様々な活動に関する客観的な検証に関心を持っており、研究活動として現在所属している社会福祉法人の利用者たちの状況を把握する調査に取掛かっております。このような個人的な事情もあり、学校に届いていた案内（ポスター）で今回の専門セミナーに関心を持つことになりました。

（中略）

実際に参加したところ、学部時代の統計科目のことを思い出すきっかけにもなり、基本的な項目を確かめながら、現在取り組んでいる調査を、もう一度振り返ることができました。
やはり、役に立ちましたのは実際の例を通して説明が行われ、自分の取り組みと比べながら確かめることができたことではないかと思います。専門書に書いてある言葉を理解することと実際の取り組みに適用することに差があるのはよくある限界ですが、今回のセミナーは調査票の実例を使ってくださり、とても理解が進みました。また、同じ調査票の回答事項を使い、分析の窓口を見せていただいたのは普段経験できない貴重な時間でした。

（中略）

今度も、より進んだ内容のセミナーを開催する際はご連絡いただきたくと思っております。今後とも、よろしくお願いいたします。

※掲載についてご本人の了解をいただいております。